

Title	フランス革命以前の知識階級：フランス革命と知識階級への序説
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.6 (1931. 6) ,p.793(25)- 845(77)
JaLC DOI	10.14991/001.19310601-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310601-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス革命以前の知識階級

——フランス革命と知識階級への序説——

小泉 順三

序

一七八九年に於ける、フランスの知識階級を構成して居つた人々は、「一七八九年のフランスに於ける第三階級」を論述した所に於て述べた如く、明白に第三階級中の主要なる一構成分子であつた。一部の史家、特に、人間の意識によつてのみ人間の歴史はつくられるものであると信じてゐる論者は、この知識階級に革命的發動力の殆んどすべてが懸つてゐるものと迄考へてゐる。

然し、革命を以つて、ルソーの民約論に現れた民主的精神の實現を市民が熱狂して求めた結果である云ふ見方や、革命によつて行はれた變革を、たゞ哲學者や演說家や政治家の政治的闘争中の「エピソード」としか認めない觀察は、革命を引起したのはバリーの貧民窟であると云ふ見方と同様に謬つた見方、少くとも、事實の中核を把握した觀察とは云ひ難い。

フランス革命を生み、且それを成就せしめたものは、依然として物心兩界を支配した第三階級でなければならぬ。即ち、階級意識に到着したブルジョアと、世界意識に到着した哲學者、思索家

だが、理論と實際に於て、全然合致して作成したものがフランス革命であると認識しなければならぬ。(J. Jaures, Histoire socialiste de la Révolution française, Tome I, p. 49).

換言すれば、我々は、十八世紀末の知識階級の存在の意義を、ブルジョアの理論的要請の作成に於て發見するものである。

以下この第三階級の理論的要請が、いかなる経過を経て、知識階級の手によつてつくられたかといふ問題について考察して見やう。この解答は、又同時に、フランスに於けるこの階級の發展史の一部ともなるべきものである。

私は、第三期に分つてこれを論述しやうと思ふ。

第一期は十七世紀末より十八世紀の初めの十年に至る間——或はルイ十四世の時代に、

第二期は十八世紀の初の五十年、いはゞ、ルイ十五世の時代を指し、

第三期は十八世紀の後半、換言すればルイ十六世の治世に該當するものとする。

ブルジョアが近世資本主義制度の發展によつて生れた一大社會階級であるとするならば、それに理論的組織を與へた知識階級も、その堅固な階級的結層に於ては近代的生産物の一つたる事は言ふ迄もない事である。

誠に、工業の發展、交通制度の確立、軍備設立、プロレタリアの都市流入、法律の必要、中央集権の發生等、すべての要素は相合して、智識の應用によつて生活する一階級、即ちインテリゲンチヤの社會的階級的成立を我々に告げたのである。

彼等は、一つの確立した形態をつくるには、あまりに廣汎な範圍に亘つてゐる。或るものは、官吏、技術家、醫師、教師、藝術家、辯護士、詩人、哲學者、國家及私企業の事務員等を列擧し、或ものは、醫師、法律家、僧侶、科學者、管理者等を指し、又他のものは、社會の共同事件である勞働の指揮、政務、司法、科學、藝術等を司るものと云つてゐる。

人々の彼等を指して云ふところは、それ／＼かくの如く同一でない。これは、彼等が、社會に於ける一定階級身分との關係のすこぶる漠然とした混合的實在として、論究の對象としては大いに難解であることを意味してゐるに外ならない。

然し我々は、エンゲルスやマルクスによつて次の如く考へ得る。

社會が自ら勞働し、自ら獨り食ふの程度の時代を脱して、何等かの餘剩價值を蓄積し初めるや、勞働にのみ従事する大多數の人々とならんで、直接生産勞働に關與しない階級が生れる。この階級の勞働は物質的生産ではないが、又、物質的生産の一部分ですらない。

しかし、全然關係を斷切られた存在ではない。それは物質的生産から發生し、分離し、獨立し、社會的活動の獨立組織の形式とまでなつたものである、と。

マルクスの所謂「觀念形態的身分」に相當するものである。

従つて、それは資本階級資本主義的制度下にのみ存在するものではない。一つの歴史的存在である。資本主義制度以前に於ても存在して居ると考へられる。我々は時代の移るがまゝに變化してゆ

く其姿を見ることが出来るのである。その結層の色彩は時代とともにいよ／＼濃くなつてゐる。古代ギリシヤ、特にアゼンヌに於ては、眞理を探索すること、哲學上の思索をなすことは、財産ある自由人の特權であつた。奴隷勞働の上に基礎をおく閑暇が、科學と藝術への道を開いて居つた。これは、古代ローマに於ても同様であつた。異なる點と云へば、その質が、前者よりも粗惡なことであつた。

然るに、科學と藝術とが中世の末再び目醒め初めた時には、其事情は甚だ異なるものがあつた。宮廷貴族は別として措けば、一方には粗野な種類に屬する享樂しか辨じ得ない百姓じみた封建貴族と僧侶とがあり、他方には、少數の除外例を除き、利潤に對する打算と投機に没頭して、自由競争が激しくなればなる程、抽象的思索の能力をそれ丈多く喪失して行つた商人階級、及び下級の激しい勞働に従事してゐる階級があつたが、何れに於ても、科學的思考に對する嗜好も、刺戟も、従つて、それに對する準備的教養機會或は閑暇を缺いて居つた。

しかも、支配的地位にあつて財産を所有してゐる享樂階級は、何れも其懷中に科學と藝術を發展せしむべき素質を持たなかつたので、思考と詩作とは、勞働者がその腕力を市場に持つて行くと同様に、その精神力を市場へ持ち行く様にされた人々、即ち、知識階級に委ねられたのである。

この知識階級は、當然、彼等の思索と詩文とを、つまり、其職業を賣つて生活しなければならぬ然るに知識は文明の進んだ社會でない限り民衆の間に、社會の中層や下層には、其需要者を發見し得ぬ一種の奢侈品である。其初期に於ては、知識は未だあまりに高等な玩具である。

従つて、哲學者や藝術家が支拂能力を充分に有する顧客として見出すことの出来たものは、たゞ王と宮廷貴族のみであつた。

王は、勿論、これらの宮廷貴族は、田舎貴族の如き粗野からは全く脱却して居り、且彼等よりずつと洗練された享樂に對する理解を有し、又計算高い商人等に比べても、遙かに多くの閑暇と、呑氣さを持つて居つたから事實、インテリゲンチヤを購買するに最も適合した階級であつた。

故に、その智識が迎入れられたところは、主として宮廷であつた。然し、王はこれによつて、彼の住居をアカデミーや哲學研究所にしようと言ふ意志は、毛頭持つて居なかつた。廷臣又然りであつた。王を以つて偉大なる藝術家、哲學者の恩顧者或は保護者とするならば、彼等も、各其地位と嗜好とによつて大小の哲學保護者、文學後援者となつた。ルイ十四世の如きはその中の最も偉大なる典型的人物であつた。

何故に宮廷や貴族が、眞理の探求者とならずその保護者となつたかと云ふに、一言を以つてすれば、その方が、物品殊に享樂品を買入れた人の心理にふさはしいからである。

廷臣は、田舎貴族のもつ粗野と共に、其元氣を喪つて居つた。従つて、その種類を問はず、目的を意識した永続的な仕事は嫌忌すべきものであつた。彼は自己を愉快ならしめるものを最も好んだ。この目的に役立つものが藝術と科學とであつた。これが第一の理由である。

高尚なものは、往々にして、その外殼のみがよろこばれて、社會的に高位をしめてゐる人々の手に常に引きよせられるものである。宮廷も貴族も、この心理によつて、丁度道化師や侏儒を抱へる

と同様に藝術家や哲學者を宮廷に幽閉したのである。これがその第二の理由であつた。閑暇を消し、享樂を増すことを唯一の目的とするならば、哲學に關する講義會話は、多量の精神的勞働を必要とするものであつてはならない筈である。従つて、それは手輕に、且氣儘に、愉快に且機智を横溢させて講釋されるべきであつた。第十七世紀、第十八世紀に於ける殆んどすべての藝術的學術的の作物が王及び貴族の硝子張りの中で成長したのは、このためであつた。近世に於けるフランスの知識階級發展の第一期は、正にひたすら、この要求に應ずるものであつた。

此條件を満さない社會學說、況してや宮廷に敵對する社會學說は、この時代——十七世紀末から十八世紀最初の十年間に於ては、たゞへ存在して居つても、全く人の注意を惹くに無力であつた。其理想は、如何に高遠であつたにしろ、社會的諸條件がそれを採用するについて有利でない限りはどんな理想でも、活動を展開する事は不可能であるからである。丁度、石の上に落ちた最良の穀種が伸び得ない姿である。

この意味に於て、この第一期は、その表面の華麗さに拘らず、知識發展の見地から云へば甚だ不作な時代であつた。

第一期に於ける知識階級は國民のものでも、貴族のものでもなかつた。たゞ一人の専制君主、ルイ十四世の獨占する所であつた。ルイ十四世に於て、フランスの知識はあまりに偉大なバトロンを拂つた。その結果當時の哲學はこの専制君主の掌中にかくれて了つたのである。

即ち資本主義以前に於ける智識階級は國主、領主、貴族等の保護物であり、贅澤物であり、彼等の被服をかざる高價なレースに等しかつた。一言にして云へば、彼等は御雇だつたのである。従つて、彼等は、下の者に對しては自負と高慢とを示し、上のものに對しては、野心と恭順とを示し、同じ仲間にしては嫉妬と憎惡とを示すのを専らとして居つた。この時代に於ては、彼等の貴族的性質が遺憾なく發揮されて居つた。

然し、資本主義の勃興及び其發展は知識階級の運命にも又當然大なる變化を及ぼさざるを得なかつたのである。

資本主義の促進者たる資本家は、封建制度の胎内に育つた商業資本家である。彼等は、王、貴族、教會の三位一躰の支配の下に於ては、最下層階級に屬するものである。が然し、社會制度の變革は、彼等を最前列に押し進めた。成上り者としての上級者の侮蔑と嘲笑とに對抗するため、彼等が用ひた唯一の道は、知識階級の利用である。

時代は、又、知識階級自身にとつても、徒らな安逸を貪る事を許さなかつた。彼等の中には、未だ封建貴族の寄生虫として、遊惰な生活に圓らかな夢を結んでゐるものがあつた。然し、更に新しい知識階級は、次の時代のために公然と、或はひそかに彼等の知識を磨きつゝあつた。彼等の主要なる武器は、イギリスのラシヨナリズムと、フランスの百科辭典學者の哲學であつた。第二期第三期に於ける、彼等の活動がそれであつた。

フランス革命を以つてブルジョア革命とするならば、封建制度から資本主義制度へのこの轉換途

上にある知識階級が、いかなる歩みを一七八九年まで續けたかといふ事は、我々がフランス革命を理解するに必要缺くべからざるものでなければならぬ。

第一期に於ける知識階級 (ルイ十四世の時代)

ルイ十四世の治世に於ては、保護政策が、自由政策を標榜する英國に對して偉大なる勢力を有して居つた。しかもこの政策たるや、フランスの商業にとつて善美なるものでは決してなかつた。フランスの商工業は、初めコルベールの保護政策によつて、多少の發展を見たが、其後の保護政策は、空しく舊套を墨守し、保護よりも、寧ろ干渉束縛の嫌があり、反つて商工業者の自由活動を殺ぎ、自由な發展を許された英國のため、漸次販路を蠶食されつゝあつた。

そしてこの精神はたゞにフランスの政治史商業史の上のみならず、純粹なる學問史の上にも甚だしく悪影響を及ぼしたのである。

何んとなれば、一方に於て、保護政策の基礎となつてゐる從屬の思想は、政治及び社會に存置せる從屬觀念は亦文學をも拘束しなければならぬと云ふ信念を國民に鼓吹すると同時に、他方に於て、父權的にして穿鑿的な中央集權制度が、國民の物質的利益ばかりでなく、其知識的興味をも制規すべき筈であるから、國民の知識の上に必ず、その明白な現象が現れなければならぬからである。

果して、この保護精神は、ルイ十四世の治世に於て、物心兩具に於ける絶大な專制政治を完成した。殊に文學上に現れたこの精神は、ルイ十四世を典型的な文學のバトロンとし、併せて政府と學

者との間に一の堅固な同盟を結ばせたのである。

兩者の間に、精神的に締結された不文律の第一條には、恐らく、王者に支拂はれた尊敬に對しては、保護と恩寵が無限に與へらるべしと書かれて居つたであらう。知識は、鞠躬如として、その最も高い買手の意を迎えたのである。

あらゆる文學者は、一朝にして、フランスの王冠にかしづく忠良な詩臣となつた。あらゆる書籍は、王の寵めでたからんがために書かれ、王の寵遇めでたきこそ、自己の文學的卓越の決定的な證據であると思ひなされて居つた。

文學者は、彼の上に課せられた古今未曾有の廣汎な專制政治を、悔ゆることなく背負つたばかりでなく、それを課した人によるこんで、且感謝の念を以つてさへ、服屬したのである。國王から保護された學者が、科學の名に於て、屢々、國王のために卑屈な仕事に働かざるを得なかつた例は、少くない。例へば或者(マリオット)はヴェルサイユに水を導くために努力しなければならなかつた。又或者(フイゲンス)は低きセーヌの水をヴェルサイユの高さに上げる工風を命せられた。

Le Yassor はルイ十四世の晩年に筆をとつて、「隷屬になれたフランス人は最早彼等の緊鎖の重みを感じない」と云ふ、辛辣な批評を無活潑な知識の活動に下した。

外國人にして、フランスを觀るものは、等しくこの状態に驚異の眼を見張つた。そして、この自發的な隷屬状態に驚いた。シャフツベレイ公は或る書簡に於て、自由に對する熾烈なる頌辭を呈した後に、附言して曰く、「フランスに於て卿等は、この議論が殆んど了解されてゐないのを發見する

であらう。時に、其閃めきは現はれるが、余は未だ自由人たるたゞ一人のフランス人をも知らぬ」と。

(二)

然らば、ルイ十四世の治世はいかなる批判價値を有して居つたであらうか。

彼の治世たるや、不幸にも、最低の道德、名譽、利益の諸標準に照合し吟味して、其何れに於ても全く賞讃に價し得ないものであつた。

彼の個人的生活の特長は、最も卑しい、且最も卑屈な迷信を伴ふ放縱極まる淫樂にあつた。晩年に於ては特にそれが甚だしかつた。

彼の公生涯も、尊大な態度と組織的な不信とによつて、事ある毎に全歐洲の怒を喚起し、フランスに著しいその返報を期待させたのであつた。

尤も、フランスに於ける中央集權制度の完成に對する彼の努力は、それを彼が無意識でやつたものとしても、彼の偉大な貢獻と見なければならぬ。この事は別稿に論ずる事にしやう。

彼の國內政策は如何と云ふに、彼は教會に對しては堅固な同盟を結んだ。彼は、法王の權威を承認する事は拒絶したが、自ら進んで、臣民を僧侶の暴虐にまかせて顧みなかつた。換言すれば、彼は自己の大權を行使する以外は、全部を僧侶の行使に委せたのである。

この結果、アンリ四世が基礎を置き、且、彼の治世迄は其儘手のつけられなかつた宗教の自由が、彼の登位以來、僧侶の煽動によつて次第に侵害され初めた。

この迫害は、マザランの死後一六六二年に初つてゐる。一六六七七年の Clarendon 公宛の Thyme

の書簡には、新教に對する烈しい迫害がフランスに於て行はれてゐるとしてゐるされ、又一六七五年及一六七六年にフランスを旅行したロックも、新教徒は毎日、この特權、あの特權を失ひつゝあると述べてゐる。そして最後には、殆んど一世紀の間土地法と歩調を共にして、信仰の自由を保證した、ナントの勅令を廢止するに至つた。

このナントの勅令の廢止は、それとフランスに於ける宗教改革との關係を思ふ時、少からぬ重要性が見出される。

何んとなれば一六八五年即ちこのナント勅令の廢止に至る迄、宗教改革はフランスに初て合法的に生存し得たからである。

この長い期間に於て宗教改革者は、自らのため、又反對者に向つて、この勅令の下に執筆し、論議した。そして、この論争は、フランスに於て、普通に信せられてゐるより以上に、實際的な、活動的な自由、科學のために有利であり、フランス僧侶の名譽となり、同時に一般思想の利益となつた自由を傳播せしめた。然るに、今この勅令の廢止は、この状態のそれ以上の進歩を停止せしめる事になつたのである。

故に、この勅令の廢止は、フランスに於ける僧侶の進歩の停止を意味するものと云つてよかつた。しかも、これがルイ十四世の意思であつた。實に、それは彼の專制政治確立の事業完成の最後の合圖でもあつたのである。

何故かなれば、第一に、一揆の形をとつて自己の意思表示を行つた貴族階級の反抗を排き、彼等

を宮廷に召喚して全く壓倒し去り、次いで勸告の形式をとつて現れたパールマンの反抗を禁壓した彼は、教會が異端とした良心の自由を尊重する新教を禁止する事によつて、人々をして、行爲に關する禁止から、良心の禁止の承認に迄徹底せしめたからである。

この勅令禁止に當つて、王のとつた手段は更に苛酷であつた。王は、恐怖の餘り新教徒が改宗するに至る程の暴虐なる手段を、彼等に加へる事を認可したのである。これを實行するに際して、兵卒は殺す事以外には一切の權利を許されて居つたと云ふ。一六八五年にフランスに居つた Birnct は「すべての人は新しい虐待方法を發明するために心を悩ました」と云つてゐる。

かゝる強壓手段が、國民經濟の上に及ぼした影響は、フランスに於ける最も勤勉なる國民五十萬人を、その熟練した勞働と共に國外へ逃走せしめて、亡失した事實と、彼等各自の職業的知識と經驗とが、この時迄母國を富有ならしめるために使用されて居つた事實から想定すれば、略々知る事が出来る。

(III)

かゝる事實が判然と歴史の表面に横臥してゐるに拘らず、文學者は、尙ルイ十四世の治世を賞讃する事を止めなかつた。

彼の治世に於ては、一切の自由の特權が破壊された事、人民は耐え得べくもない課税によつて打挫かれて居つた事、彼等の子供は軍隊を膨張せしめるために幾千となく彼等から奪去られた事、國富の資源は極度に蕩盡された事、換言すれば、最惡の專制政が堅固に樹立されて居つたと云ふ事は、

よく人に識別せられて居つた事實であり、又等しく人の容認したところであるにも拘らず、彼等は政府と同盟の一員として、強いて筆を曲げたのである。

我々は、王者が文學或は科學を保護する場合、若しその王の知識が不確實であるか、或は其判斷力が多くの僻見に阻げられて居るならば、その保護なるものが常に有害なる結果を齎し、其上に智識の進歩を阻止する事を記憶すべきである。

かゝる場合、我々は、王が文學及科學の賢明なる保護者たらん事、或は、何等かの方法で時代を指揮すべき事を希望するよりも、寧ろ、彼が時代精神に頑強に反對しない事、或は彼が、社會の進歩を阻止する結果を生せしめない事文を希望し、且それが達成せらるれば大いに満足すべきである。何んとなれば、若し王にして自己の智力の劣れるに拘らず、甚だしく度量の狭い人であつたならば、その必然の結果として、彼は最も有用な人々に報賞せず、最も従順な人に褒賞を與へるか、或は僻見を抱き、古き弊害を辯護する人に愛顧を與へる傾向が甚だ大であるからである。

又、これを受ける方から云つても、人は、金錢的褒賞と名譽とを問はず、すべて受くる事を好むが故に、ともすると、これに誘惑され易い。この結果、自己の感情の發表の大膽さと鋭さを弱少ならしめ、その著作の價値を自然低下せしめる憂も少しとしない。この事は、歐洲諸國の王によつて與へられた文學上の年金表を作成して見れば、明白に立證されるであらう。若し、これが出來たならば、この報賞やそれに類似した恩賞によつて産れた不幸が、明白に我々に示されるであらう。

フランスの史家 Mezeray の如きは、其一例としてあげる事が出來やう。彼は、王から四千法の

年金を受けて居つた。一六六八年に、彼は其著フランス史の要約を發行したが、その中で課税の傾向に關して費した數言が、政府の高官の非難を惹起する憂のあるといふ忠告を受けた。然し、賃金を受けてゐるものは、それを支拂ふ人の命令を遂行しなければならぬといふ自己の立場を自覺するには餘りに正直であり、且大膽すぎた彼は、その箇所を訂正する様子を示さなかつたため、彼を威壓する手段として、年金の半分が奪取された。然も尙、その無効さが實證されたため、残りの半分の奪はれて了つた。

フェネロンも亦、一六九九年に書いたテレマックのために Mezeray と同様の道程をたどつた。

彼は、貴族なるが故に、君主獨裁政治を快からず思ひ、博愛を主義とするが故に人民を憐み、僧侶なるが故に戦を悪んだのであるが、自ら革新運動の陣頭に馬を進めるといふ種の活動家ではなかつた。その試みんとした所は、唯々ギリシヤの昔話に事よせて、王の三人の孫に自己の理想を中心とする教育を授けて満足するにあつた。

Mezeray, Fenelon に於て、かくの如しとすれば、これ等のより下位にある人々を遇する王の態度が、より優しいものであることは期待出来ない。Rouen の商人、Boisquillebert 及び七十四才の老將軍 Vauban の二人は、我々の注目すべき犠牲者であつた。換言すれば、宮廷の裝飾、上品なる話相手以上の何者かたらんとする人——當時の支配階級意識と一致しない學者は、すべてこの運命に陥入つたのである。

反之、彼等の嗜好に投じた學者には、如何に多くの報酬が與へられた事か。

如何なる時代に於ても、ルイ十四世の時代程財を惜しむ事なく學者に與へなかつた、従つて如何なる時代に於ても、この時代程に、文學者が卑屈を極め、眞理の使徒、知識の使徒としての彼等の大なる職責を果し得なかつたことは、なかつた。

當時の著名な著述家の生涯は、彼等の知識、心意の高さに拘らず、彼等が如何に周圍の腐敗を拒絶し得なかつたかといふ事を如實に示してゐる。

「王を崇め、教會を尊ぶことは、當時の二つの主要な格律であつた。服従と信仰とは、時代の根本的觀念であつた。改良と改革は、嫌忌せられ、新意見は侮蔑せられた。その上、著者は罰せられた。」従つて、王の寵遇を得んために、「生命よりも尊い獨立心」を失ひ、一椀の食のためにその生得權を賣る當時の文學者には、政治の腐敗を阻む勇氣は全くなかつたのが當然であつたと、バックルは云つてゐる。(Buckle, The History of Civilization in England, vol. II, p. 282)

服従を風習とし、隸屬を快樂とする文學者の弄ぶ文學は、忽ち色褪せて、其大膽さを失ひ、傳統が眞理の基礎となり、研究的努力を失つて了ふ。この時こそ、その時代にどつて最も悲しいものを意味する。即ち輿論の出口は何れも閉されてゐるから、人々は全く其思想を吐露し得ない。發する事の出來ぬこの不満は、次第に内に蓄積し、人の胸を搔きむしつて恐しい憎惡の念に化して了ふ。かくして無言の中に集積された彼等の感情は、何等かの刺戟さへあれば一切の忍耐を失つて恐しい革命に導かれ、これによつて彼等の報復を行ふものである。

一切の獨立は去り、一切の純正、一切の勇氣は失せ、政治に於ては專制政治、文學に於ては隸屬、

これこそ實にルイ十四世治下のフランス社會状態の要約であつた。

(四)

然るに、彼の時代の華々しい文學と見るものは、この文學の隆盛が主として彼の手によつて養育されたものであるといふ意見を持ち勝である。

バックルはこれに對して、次の如き二つの立場から反對意見を述べてゐる。(Buckle, op. cit. p. 188)。

第一、彼の治世の學問上の壯麗さは、彼の努力の結晶でなくして、彼の治世に先立つたそれの仕事である。

第二、フランスの知識階級は彼の寛容によつて利益を受けるよりも寧ろ、彼の保護によつて打撃を受けた。

第一の場合について述べるに、ルイ十四世は一六六一年に政治を執つたが、この年から彼の死んだ一七一五年迄の間、フランスの歴史は、學問的大發見に關して考察すれば全く白紙であつた。

彼の時代の表面的隆盛さによつて誘はれ易い一般の先入觀念から、一切の關係を斷つて、公平に當時の文運を検討するならば、あらゆる方面に於て、創思的思想家が跡を絶つて居つた事が分るであらう。勿論壯麗なものも多く存在した。魅惑に富んだものも多かつた。然しその何れも、人類の知識の總額に、殆んど何物も加へ得ない性質のものであつた。

十七世紀のフランスの最も卓越せる開拓者と云へば、デカルト、バスカル、フェルマー、ガザン

デイ、及びメルセーヌを推す事は、何人も許容する所である。

然るに、この人々は、何れも、王が未だ搖籃の中にあつた時分に、彼等の研究に没頭し、王が施政を司るに至る前に、それを完成してゐる。彼等は、王の保護政策の實行されぬ時に其仕事を完成してゐるから、彼はこの名譽ある分前に預る權利をもたぬ筈である。

デカルトは、一六五〇年まだ王が十二才にしかならぬ時に死んでゐる。又、普通デカルトと同様に、ルイ十四世の治世に結びつけられてゐるバスカルも、彼が歐洲社會の名聲を勝ち得た時には、ルイ十四世は、未だ小兒部屋で玩具を以つて遊んで居つた。従つて、かゝる人間の存否は、彼の頭腦に何の關係も與へなかつたのである。

バスカルの圓錐形の切斷面に關する論文は、一六三六年に、空氣の重さに關する彼の決定的實驗は、一六四八年に、彼の最後の最大な研究である擺線に關する論文は、一六五八年に書かれてゐる。當時、ルイ十四世は未だマザランの後見の下にあつたから、實際上政治については何等權威を有してゐなかつた。

フェルマーは十七世紀の最も深真な思想家の一人であり、特に幾何學者としては、デカルトに次ぐ唯一の學者であつた。彼も亦、其重要な著作を一六三六年、又はそれ以前に完成してゐる。ガザンデイ、メルセーヌについては、前者が死んだ時には、ルイ十四世が國政の頭となる六年以前の事であり、後者の死んだ一六四八年には彼が十才であつた。

かくの如く、以上の四人は、ルイ十四世の所有に屬するとは云ひ得ないのである。

彼の施政五十年の間數學の各方面に、又音響學を除いた他のあらゆる應用數學に於ても、何等重要な收穫は加へられてゐない。

天文學に於ても、手工業に於ても、同一の傾向が看取される。

ルイ十四世は、豫ねて、天文學を重要な學問であると教へられて居たので、其研究を助成し自己の名に名譽を加へたいと考へた。この理由で、彼は比類のない程且浪費的に斯學の教授に報酬を與へ、其上巴里に華麗な觀測所を建てた。

イタリアからはカシニ(Cassini)デンマークからはローメル(Römer) 和蘭からはフイゲンズ(Huygens)等、著名な天文學者を彼の宮廷に招いた。このために、實證科學、特に天文觀測に於て大なる發展を見た。然し、かくの如き獎勵にも拘らず、斯學について劃世的な發見の一つさへ成就されなかつた。この間にあつて、フイゲンズ——デカルトの感化を受けたオランダ人——の光の波動説(一六七八年提出)こそ、いみじくも咲いた美しき理論の花であつた。

この頃國外、殊に英國に於ては、一六八七年にニュートンの Principia が現れて、彼の廣大の總論は、殆んど物理學の全部門を改革し、引力の法則は、天文學に、大改造を加へたのであるが、フランス人はこの驚異すべき發見を全く等閑に附して顧みない程の麻痺状態に陥つて居つた。

ニュートンの説は、彼の不朽の名著が、出版されて以來四十五年後、即ち一七三二年迄、一人のフランス人も採用しなかつた。この一七三二年に、初めて、フランス最初の天文學者たる價值を有する Maupertuis が、引力學説の批判的辯護を試みた。

一七三八年にヴルテールは次つ如く述べてゐる。「物理學に於て、ニュートンの學説が論議されてゐる國は、今日フランス丈である。我々は、天文學全體については、學士院の數箇の手記の雜漠たる結合にすぎぬ *Bion* の書を有してゐる丈である」と。

要之、當時の科學界は「太陽王」の壯大を飾るためには物足りなかつた。この物足りなさは外國の學者を招聘する事によつて僅かに滿されて居つたのである。

又、自然科學中の主要な一部門である植物學についても、我々は驚くべき無活潑を發見する事が出来る。

有名なサー・トーマス・ブランクンの息は、教授を遇するに甚だ丁重であり、しかも、其研究には莫大な獎勵金が與へられ、科學が甚だ隆盛である國に於ては、必らずや得る所の大なるもののある事を豫期し、植物學に關する彼の智識を増したいと云ふ希望の下にパリを訪れたが、一六六五年のこの大都市に於ては、斯學について彼に誰一人教へうるものもなく、又、それに關する公の講義の如きも貧弱極まる程低級であるのを發見して、呆然としたと、其父に報じてゐる。然も、この淋しさはたゞに學理上に止まらなかつた。實用上の必要に對しても、缺くところが多かつた。

細微に亘つて正確を必要とする器具は、フランスの職工の不熟練のために、作ることは出来なかつた。これが製造は、主として、外國人の手に委ねられた。十七世紀末にパリに居つたライスター博士は、この事に關して、パリに於て販賣されてゐる最良の數學器具は、フランス人によつてつくられずに當地に滞在して居つた英人バターフィールド(Butterfield)によつてつくられたもので

あつたと云ふ證言を残してゐる。

當時、英人に對する、フランス人の強い僻見が存して居つたにも拘らず、バターフィールドが王や諸侯によつて使雇されたと云ふ事は、よく此の間の事情を物語つてゐると云はねばならぬ。

従つて、製造業に對して實施された改造も甚だ寡少であり且重要なものではなかつた。又、たとへ、工業に改良が加へられたとしても、それは、國民の幸福増進のためではなく、奢侈階級の奢侈欲を充足するためにすぎなかつた。

ギユイ・バタンは一六七一年に「若しコルベール氏が死ぬ事になれば、彼は、彼がフランスに設立した凡ての製造所に、左様ならを云はねばならぬと云はれてゐる」と書いてゐる。(註中世職人史) 勿論彼の死によつて凡ての製造所は廢止されはしなかつた。然し、彼の死後二年にして、前述したナント勅令の廢止は、フランスの工業に大なる打撃を與へ、斯業はこのために、永い間復興し得ない様になつたのは事實である。

この廢止は、經濟的見地よりすれば、専制君主政の最も大なる失策の一つであつた。

當時、凡ての新教徒は迫害の的となり、その迫害から逃れやうとする彼等の移住すら、終身懲役や、少くとも、三千磅の罰金刑で阻げられて居つたにも拘らず、移住は國境に向つて流れ、フランスに於ける、凡ての手工業及び製造工業の秘訣を持ち去つたのである。「フィザンスもこのために和蘭へ歸つた。(一六八一年)」

それが、一六八五年頃からは實際の移住になつた。不幸な手工業者は、彼等に太陽に對する一つ

の座席を拒む厭ふべき祖國から、群をなして退去した。ユグノーは和蘭へ、イギリスへ、アメリカへ走つた。初めから政治的軍事的勢力を取上げられてゐた彼等こそ、工業生産、精練技術の大なる所有者であつたのである。それが今や、この移住のために、彼等のその技術自體が反つて、フランスの競争國を強大ならしめるに役立つたのである。

従つて、大多數の工業がフランスに於て殆んど根絶するばかりになつたと同時に、フランスから「多くの金銭と有能な頭腦」を勞せずしてかち得たオランダは、フランスから帽子、羅紗、フランテン、天鵞絨等を輸入する事を止め、英國は、紙、絨氈、精巧麻布、帽子絹等について同様の事を行ひブランデンブルグ選舉侯は大いに富んだのである。

つまりルイ十四世の宗教政策は、現在及び將來に亘る禍根をフランスの工業及び經濟生活に與へたのである。

かく論じてくれば、ルイ十四世の時代を無價値とするバツクルの第二の論據は最早之を證明する必要はないであらう。

バツクルは更に反問して曰く、王の保護の結果は何んであつたか。腐敗隸屬及び歐洲の大國の何れに於ても目撃する事の出來ぬ完全なる國力の喪失、これこそ、ルイ十四世の時代の一切の事情の結果であつたと。

人民に自由がなければ、従つて、偉大な人物も生む事なく、文學らしきもの、藝術らしきものもなかつた。内には不平な國民、貪慾な政府、及び赤貧洗ふが如き國庫が存し、外には、フランスの

四邊を脅かす外國の軍隊が居つた。そして、彼等の間の嫉妬と英國內閣の更新のみが僅かにフランス王國の分解を防いでゐる有様であつた。

マンテノン夫人は、フランスのこの疲弊を認めた上、次の如く述べてゐる。

十八世紀の初、巴里に於ては、富裕階級でさへ資源が枯渇し初めた。公私ともく、信用は甚だしく地に墜ちて了つたため、いかなる條件を以てしても、金を得ることは不可能であつたと。

一七一〇年、彼女は五百リーブルの金が借りられなくてこぼした程である。一七〇九年に彼女は「賭け事も殆んど金をかけなくなつたから面白くなくなつた」と書いてゐるかと思ふと、其翌々年一七一一年の二月には、「我々宮人が賭け事をするのは金がありあまつてする事ではなくて、貪慾からである。人々はいくらか儲けたいために賭ける。そこで、カルタの卓は、遊戯と云ふより以上に悲惨な取引の有様である」と書いてゐる。

一般人民の状態如何と云ふに、彼等については極く少數の例外を除いては、フランスの多くの著者は何等記述してゐない。偶々記述したものはあつても、そのために、筆者は罪を得るにすぎなかつた。ポーバン將軍は其適例である。従つて、フランス人民の事情は、フランス人よりも反つてイギリス人によつて多く讀む事が出来た。

一六七七年頃にフランスを旅行したロックは、「この數年にフランスに於ける地代は人民の貧窮のために二分の一下落した」と。これと殆んど同じ頃にサー・ウィリアム・テムブルは「フランスの農民は勞働と缺乏とによつて全然無氣力になつてゐる」と述べてゐる。

又一六九一年に、他の或る旅行家は、カレーからの書簡に曰く、「これからパリまで旅行すれば、暴君の野心と専制とは、繁榮にして肥沃な國民を如何に甚だしく貧困な國民となしうるかと云ふ事を觀察するに充分な機會がある。増大して行く不幸の一切の指標と徴候、壓倒的災厄の陰鬱な一切の指示が、歴然と見えて居つた。田園は棄てられ、村落は人口が減少し、家屋は朽ちるになん／＼として居つた。」

又或人は曰く「驛馬が變へられる間、町の人は全部出て来て物を乞ふた。その顔色は見るも無慘に餓え、疲れ、衣服はボロ／＼に破れて居つた。これ以上雄辯に、彼等の状態の悲惨さを人に説得せしむるものはない」と。

我々は何によつてルイ十四世の時代を聖代と稱するか、その理由を知らないのである。

私は以上縷述して來た所によつて次の如く結論しやう。

専制政は自由制度と全く相反するものである。自由制度は自由研究の精神に満ちてゐる制度である。我々の知識は、この精神を得て初めて、充分に成長しうるものである。

私は、この點から見て、古代制度を全く破壊しながら、尙、自由なる制度を以つてそれに換へやうとせぬルイ十四世の治世、それに束縛されることを欲しなかつたがために古代制度を破壊しながら、尙、それに束縛されてゐる彼の治世、換言すれば、自由制度のみが政府の賢明にして永續の保證であることを察知し得ず、専制政治を固持する彼の治世を以つて、國民を中心とする知識の眞の發展に貢献したものは斷言出来ぬと思ふ。

然し、かくの如く彼の治世を論断して了ふことには幾多の異論を有す人があること、思ふ。何んとなれば、上述したところは、あまりにルイ十四世の治世の過失について述べてゐるからである。専制政治の矯正し難い弊害についての多き記述してゐるからである。ルイ十四世の治世には他のすぐれた點がある。

それは君主政治の確立と中央集權の完成である。彼の戦争慾も、この點からすれば、たゞ彼の個人的野心を充足するためのみであつたとは速断出來ない。權力なき政府に強固な中央的權力を與へるためには、武裝の示顯を大いに必要としたのは無理からぬ事である。彼によつて完備された中央集權が、國家の行政及び立法について與へた貢獻も亦少なからぬものがあらう。

私はかゝる貢獻を没するものではない。然し、こゝに於ては、主として、知識階級の發展を考察するが故に、以上の如く斷定したのである。

第一期に於ける知識は、かくの如く無氣力であつた。社會制度に對して何等叛逆の色を見せなかつた。恩惠の代償として乞はるゝまゝに良心の賣却が行はれて居つた。然し、これにも限界がある。ルイ十四世が死するや、果して知識は反動期に入つたのである。私はこれを十八世紀のフランスに於ける知識階級發展の第二期と稱する。

第二期に於ける知識階級 (ルイ十五世の時代)

(一)

十八世紀のフランスに於ける知識階級發展の第二期は、ルイ十四世に對する反動と、英國思想の

影響及び其具體化を以つて終始した。そして、世人は漸く社會制度に手を觸れ初めたのである。

イギリスの影響は二つの點に要約することが出来る。

其の一つは、政治的であつて、市民的自由と個人の權利に對する觀念を英國から持歸つたフランス人は、これを民主的傾向に結びつけたことであつた。この事は、フランスの君主政治に恐るべき運命を與へるに至つた。

第二は、イギリスの唯物論がフランスの懷疑論と結合し且ニュートンの科學がこの無神論を促進するために使用せられ、その結果、キリスト教及び教會に對する急進的排斥となつたことである。

モンテスキューは「法の精神」に於て曰く「ルイデアナの野蠻人は果物が欲しい時樹を根元から切倒して果實を採る。これが即ち専制政體だ」と。(法の精神、第五篇第十三章)。

この句は、ルイ十四世の治世のあしき半面を、恐らく、最も簡單に我々に説明してゐるものであらう。

今この偉大なる君主が死んだのである。

彼の死を吊ふにミネー (Mignot) の言葉を以つてするならば、

「ルイ十四世の莫大なる力は、内的には、異教徒に對し、外的には、全歐洲に對して發揮された。壓迫は、相談相手たる野心家を發見し、龍騎兵は、仕ふべき野心家を見出し、成功は、それを激勵する野心家を發見した。フランスの傷は、月桂樹をもつて隠された。彼女の苦悶は戰勝の歌の中に埋れた。然し、遂に天才人は死んだ。勝利は止んだ。産業は移轉した。金は消滅した。そして、專

制政治の成功そのものは、其資源を涸盡した。將來が到來する以前に、其將來を消費したといふ事實が、明白になつて來た。」(Mignet, History of French Revolution. p. 6)。

残された結果はこれであつた。然し、時人は、直ちにこの悲しむべき事實を見て悲しみはしなかつた。彼等は、この結果を悲しみ且これに對して憤怒を感ずる前に、賀すべき事を先づ發見したのである。

これより先、王が病に臥すと聞いても、バリーは「平然として些の感情も動さなかつた」。

人々は、何れのルイも重症に伏してゐないかの様に、各自の有用無用の仕事に精出して居つた。王の病氣のために捧げられてゐるものは、毎時間若干と定つた値段で誦まれ唱へられる司祭達の連騰のみであつた。(柳田泉譯、カーライル著、フランス革命史(一)三頁)。

もつと分り易く云へば、「王は死ぬだらうか」、これこそ、全フランスにとつて大問題であり且大希望である。たゞそれによつてのみ、王の病は未だ多少の趣味を人民に繋いで居つたのであるからと、カーライルは實に巧に述べてゐる。

さればこそ、王が最後の息を引とつたと云ふ事が一應世に知られるや、人々は殆んど狂氣の如く歡聲をあげたのである。「大王の死の布告はフランス國民に、たゞ、よろこびを爆發させたのみであつた」とシスモンディは記してゐる。(Sismondi, Histoire des Françaises vol. I. p. 220)。

ルイ十四世の葬儀當日には、ブルボン王家歴代の墓所サン・ドニに通に居酒屋が軒を並べた。當路の大官は、この度の葬儀は如何程手軽にしてもいいと感じた。かう云ふ覺悟の一連が炬火をとつ

て、だが喪服さへ着ずに棺を曳いてヴェルサイユを出た。可成り早足に出掛け、その歩度を緩めな。なんとなれば、今述べた如く、サン・ドニに至る沿道の兩側に立並んで、國人の特色たる、その諧謔性を十二分に満足させる「バリー人の嘲笑が人々に歩度を緩めさせなかつたからである。

ウルテールは、好奇心に馳られて王の葬儀を見に行つたが、この居酒屋で人々が酒に酔ひしれて王の死をよろこんでゐるのを見た。

カーライルは書いてゐる。泣いたものは、極所の尼院にゐる、故王に棄てられた姫君ロークの眼丈であらうと。彼の筆は全く巧妙さを盡してゐる。

「嗚呼、病に臥せるものは、哀れなルイ一人丈に止まらぬ。一個のフランス王丈でない。フランスの王位そのものも病に臥したのである。」

世界はすべて一變した。昔強盛と見えた、幾多の事實が消滅に近づき、代りに昔存在しなかつた幾多のものが存在し始めた。大西洋を渡り、ドウバーを越える人間の意志の足音は、將に眼を閉ぢやうとするルイの耳にも響いたのである。(カーライル、前掲書三〇—三二頁)。

實に「ルイ十四世の死は反動のシグナルであつた。」ルイ十四世の死に於て、文學のみならず、政治、宗教、道德あらゆるものに於て反動は熟して居つた。そして、カーライルの云ふが如く、過去が醜惡なものであつた丈に、特にこの反動も燦然として光つた。(Mignet, op. cit, p. 6; Buckle, op. cit, p. 291)

この反動は二つの形をとつた。

一つは、頑迷から輕信と淫樂への轉換、他は服従の精神から議論の精神への躍進であつた。第一に、多くの人々は今迄強制されて居つた偽善の代償として、限りない淫亂の生活をよろこんだ。

宮中に於て、殊に、この風潮は靚面に現れた。前王の死は、虚禮虚儀に加へて、陰鬱なる敬虔を假裝する原動力たるマンテノン夫人の勢力を、一朝にして地を拂ふに至らしめたからである。これが第一の形で現れた反動であつたが、これは亦すべての攝政時代の特長でもあつた。

例へば、カトリアンヌ、マリ・ド・メデシス、アンヌ・ド・オートリッシュ、それから今このヒイリップ、ドルレアン時代の代がそうであつた。

然し、この時代の人々の中にも、遙かに高い見解を持ち、賭博場や娼家の放縱のみが自由の本義であると解しなかつた、氣高い氣風の青年があつた。

第二の反動はこの雄々しい青年によつて叫ばれた。バックルは云ふ「フランスが失つた言論の自由を回復しやうと云ふ大なる理想に身を捧げた彼等は、當然に眼を轉じて、唯一の自由を實踐せる國を眺めた」と。(Buckle, op. cit. p. 213)

海を隔て、彼等に對峙するものは、イギリスである。五十年間、甚だしく虚弱な制度に暴露されて居つた國民の中に、反動の資源は發見しうべくもなかつた。この點から云ふと、「英國は幾分中世紀の遺臭が、丁度木乃伊の様に保存されて居つたが、十七世紀に於ける唯一の近世的國家であつたのである。」(Tocquville, *Ancient regime and French Revolution*, p. 34).

獨り自由を發見しうる國に於て自由を求めやうとする彼等の必然なこの探求心は、やがて、英國とフランスとを知識的に結びつけるものとなつたのである。

かくして、ランゲの所謂「ルイ十四世の死(一七一五年)と共に、近世史に於ける教育ある者等の哲學的形式にとつても、諸國民の社會的及び政治的運命にとつても、重要なあの注意すべき分岐點、即ち、かくも突然に、かくも強く發展したイギリスとフランスとの知的交渉がやつて來たのである。」(ランゲ著、*唯物論史*、(大思想全集第二十二卷)三二三頁)。

トックビエユが、フランス以外の何物かを研究觀察せずしてフランス革命を了解する事は、何人にも不可能であると論じてゐるのは這般の事情を指したものである。(ibid. p. 34)。

(II)

この思想的變換は、バックルの文明史中に活々とした、そして幾分の誇張を以つて、我々に描かれてゐる。

國民的虚榮によつて尊大を極めて居つたフランス人は、彼等の支配者を變更する事を常習犯とし且四十年間に一人の王を處刑し、他の王を黜ける如き非文明な國民を野蠻視して居つた。ルイ十四世時代のフランス人には、かゝる不安な群衆が、教養ある人の注意に價する何物かを所有してゐるとは、どうしても信ずる事は不可能であつたのである。従つて、英國の法律、文學、風俗等は全くフランス人にとつて未知であつた。ウルテールも、「ボアローの時代には、フランスでは、誰れも英語を學ばなかつた」と云つてゐる程であつて、バックルによれば「十七世紀末には、文學に於て或

は科學に於て、何れに於てもフランスには英語に精通してゐる人は五人あつたかどうか疑はしい」のであつた。(Buckle, op. cit. p. 214)。

若し、ルイ十四世時代のフランス人がイギリスといふものを知り得たとするならば、それは主として、Monconys 及び Sobier と云ふ二人の田舎者が、おぼつかない筆を走らして書いた英國旅行記によつたものであつた。これらの記事が、彼等にとつてイギリスを知る唯一にして重要なガイドであつた。

然し、今や、ルイ十四世の治世が彼等に與へた經驗全部は、彼等をして自己の意見を多くの點で訂正する必要を感じしめた。

彼等の長い經驗は、專制政は彼等に不利益な點を有してゐる事、王侯と僧侶から成立してゐる政府は、文明國にとつて必ずしも最善のものではないと云ふ事を考へさすに至つた。

モンテスキューの言を藉りて云へば、「先王が眼を閉づるや否や、人々は新らしい施政を樹てやうとした」のである。(Montesquieu, Lettre persons, CXXXVIII)

彼等は、先づ禮儀を以つて、次には尊敬を以つて、この不可思議にして奇怪な國民を見直さざるを得なかつた。

かくして、彼等の歴政者を罰して人民の自由と繁榮とを世界に比を見ぬ程高度に迄運んだ國民、ほんの一輩帯水を隔てゝゐるにすぎなかつたが、全く別種の人種の觀を呈してゐるこの國民を知るために、英語が、そこゝで學ばれた。

彼等は、英語を學ぶ能力がなかつたのではなく、そう欲しなかつた丈であるから、學ぶとなると流行は風よりも疾かつた。尤も革命勃發前には、フランスに於ける知識階級全部によつて抱かれる迄になつて居つたこの感情も、當初に於ては、知識によつて時代の先頭に立つて居つた、少數の人々に限定されて居つた事は云ふ迄もない。

かくして、ルイ十四世の死から革命の勃發迄の間には、英國を訪問するか、英語を學ぶか、どちらか一つをしないフランス人は殆んどなくなり、多くは、二つながら併せ行つて居つた。

ビュフォン、ブリッソー、エルベチウス、ラランド、ラファエット、モンテスキュー、モーペルチユス、モレルト、ミラボー、レイナル、ルソー、セギュール、シュアール、ヅルテール等々枚擧に違ない程多數の名士が、矢續ぎ早に海を渡つて、英語を知り英文學の精神を伴つて歸來したのである。彼等は、自然神教、無神論、唯物主義、懷疑說、自然主義、人權宣言等、所在の僅少な思想家の孤立した書齋内に開化した温室の花、同様の革命思想、「戸外に出すと、暫く開化の後土地を既に占有して居つた古い植物の強烈極まる競争に堪えかねて枯れ萎んで了ふ、故郷に容れられざる花」(註)の種子を各自好むがまゝに懷中に入れて居つた。(Taine, l'ancien regime vol. II. p. 78)。

註 パークは「フランス革命考察」に於て、この「故郷に容れられざる花」について次の如く論じてゐる。「過去四十年の間に生れた人にして誰が Collins, Toland, Tindal 及自由思想家を稱する一類の者の言葉を讀んだか?」と。

この文化移動の始源を劃期する必要があるならば Bèat de Muralt (スイス人にして一六九四—五年に英國へ旅行す)の英佛通信 Lettres sur les Françoise et les Anglais 公刊の年一七二五年として

もよし、ブレヅ師の新聞 *Le Pour et le Contre* (一七三三年—一七四〇年、二十卷) 公刊の年一七三三年としてもよし、又、ヴルテールの「英吉利哲學通信 *Lettres philosophiques* (註) 公刊の年一七三四年としてもよい。(ブリュンチェール著、フランス文學史序説、一五八一—一五九頁)。

(註) ヘフディングは、ヴルテールの書簡は恰も文明史上の回轉期を語つてゐるもの、別言すれば、英國思想を大陸に移植したものに外ならぬとのべてゐる。(北吟吉譯、ヘフディング近世哲學史上卷五五七頁)

ともかく、かくの如き経過を以つて、フランスに移植された種子は、異常な活力を以つて生長繁茂した。そして、攝政以來、眞盛に開化したのである。テイヌによれば、この中でも、一七二一年に刊行されたモンテスキューの「波斯人の手紙」は、この世紀の重要な思想の全萌芽を抱擁して居つた美しい花であつた。(Taine, op. cit, p. 78 Note 2)

人々は、この花を美しい食卓の眞中に飾つて、晝と云はず夜と云はず語り合つた。そして、この花から發する馥郁たる新生命は、フランスの社會の疲れ切つた身體に吸込まれて、デカルトの時代に於ては見ることの出来なかつた様な想心な探索的精神を普及させた。(Buckle, op. cit, p. 419) この状況を、テイヌの麗筆によつて説明すれば、「亭々たる大木や、密生した切株や、荆棘、下草の叢に比較すべき、ヴルテール、モンテスキュー、ルフォー、デイデロ、ダランベール、ブユフォン、デュクロ、マブリー、コンデアック、チュルゴ、ボーマルシユ、ベルナンダン、デ・サン・ピエール、パーレミイ、及トウマ等を初として、雲霞の如き新聞記者、雜誌編纂者、活好者、哲學、科學、文學に従事する選抜きの人物及び群集により、そは、學士院も劇場も、客室も會話も占有され

て了つた」のである。(Taine, op. cit, p. 78-79)

(III)

彼等の會合するところは、サロンであり、カフェーであつた。中でもサロンこそ、彼等の好んで集り好んで談笑する所であつた。サロンとは人の來つて談笑するところである。有閑者にとつては、閑多き事が如何に彼等を苦める機因であらうか。偶々、人の來て自己を楽しませ、しかも其話柄たるや新しき國の見聞である。若し、其人が高名ある人であつたならば、又其人が話上手であつたならば主客何れも如何にそこから利益を得、又如何に其れを楽しみ笑ふ事が出来るであらうか。

しかもテイヌによれば、これこそフランス人の本性であつたのだ。彼の云ふ所を聞けば「フランス人は本能的に寄合が好きであり」、「一日十時間も人を相會せしめる制度に向く人物につくられて居つた」のである。一七八五年に一英旅客も云ふ「不斷に陽氣であるのがフランス人の特色である」と。

然も、サロンが嗜好に適合したのは、たゞにフランス人ばかりではなかつた。サロンは、フランスに來り遊ぶ者すべてを吸収した。従つて、サロンあるが故に、パリは最早フランス人の首都でなく、ヨーロッパの學校である、禮讓の學校であつた。そこには、ロシア、ドイツ、イギリスから若い人々が其智識、其風采を磨き上げに集つて來た。チエスターフイルド卿の如きも、其書簡に於てこの事を彼の愛兒に反覆し、サロンに入る事は「ケンブリッヂの鎗」を落すがためである事を力説して止まなかつた。ヴルテールも、次の如き興味ある記述を残してゐる。曰く「此所で、藝術と靜

寂、微笑と悦樂の奥底に營む生活の甘味には、何物も比較にならぬ。外國人も、王者も、其祖國を捨て王位を捨て、しかし愉快にして魅惑的な安息を選ぶに至る、……ロシア人に敗れたグスターフ三世は、其晩年をバリーの廣小路の邸で送らうと云つた。それは單なる御世辭でなく、實際設計圖と見積書をとりよせた」と。

然し、サロンは、たゞルイ十五世の時代に初めて存在したのではない。我々がこの時代に於けるサロンの存在を重要視するのは、ルイ十五世の時代に初めて、其社會的存在の意義が我々に明示されたからである。前述したルイ十六世死後の反動の二形式が、一體となつて、而も、最もフランス人の本性と一致した形で、このサロンに於て、その實際的具體的表現形式をとつた事に於て我々は其社會的意義を發見するのである。

サロンは、既に、十七世紀の初から存在して居つた。専制王政の確立と、近代的商業の開始とは、早くから此種の存在物を伴つて居つたのである。

即ち、一六一〇年頃から、上流社會の客間——ランブイエ侯爵夫人のサロン等——は貴族、貴女ブルジョア、文學者等の會合の世界となつて居つた。談笑の裡に粗野の風習は洗練され、淑女才媛によるフランス語の純化が行はれた。一六三五年リシュリューによつて設けられた國家的機關アカデミー・フランセーズは、國王の祕書官コンラールの下に集つた文學者の一團を基としたものであると云はれてゐる。小倉金之助氏は云ふ、ルイ十四世の若い時代の社交界は數學史上恐らくは、より重要な紀念品を残してゐる。それは確率論の誕生であつた。古い由緒正しい家柄の出たるブレー

ズ・パスカル(一六二三—一六六二)が、一時社交界に出入して世俗的歡樂を味つて居つた時であつた(一六五四年)と。(思想九四號、階級社會の數學)これは、確率論が十七世紀中頃のサロンから生れた事を指すものである。

とまれ、サロンは知識の一切を支配したと云つてよかつた。知識の生産、分配、消費、一切はサロンを中心として行はれたのである。

第一に、我々は當時の著述が一つとして、社交界の紳士、特に夫人のためにデディケートされてゐないものはないのを發見する。

フォン・チューネンの「世界の多數性」の對話中の中心主人公は、一公爵夫人であつた。ゾルターは、シャアトレ公夫人のために、「形而上學」と「風俗論」を書き、ルソーはエビネエ公夫人のために「エミール」を著した。かう云ふ風に、コンディアックは誰れのため、モンテスキューは誰れのためと書いて行けば、際限はない位である。

かくの如く、一切の著作は客室から生れ、公衆に向ふ前に先づサロンに其原稿が備へられるといふのが當時一般の慣行であつたのである。

テイヌは「この點については、習慣は極めて強固であり、一七八九年の終末に至る迄持續した。國民議會に於てされんとする演説は、夜會で貴婦人の前で豫習して喝采を博した一節であつた」と云つてゐる。

サロンに於て、斯様に婦人が主要性を有して居つた事には、我々は次の如き三段論法的理由を發

見する。何故なれば、サロンは家庭である。家庭の華は妻である。従つて、サロンの華は夫でなくして當然妻であると。

婦人の権力は次第に伸長された。ブルボン公の内閣時代(一七三三—二六)に、ブリイ侯爵夫人が出づるに及んでは、婦人の権力は國政に参加する迄に進んだ。例へば、ランベール夫人は多くの學士院會員を製造した。タンサン夫人は、樞機官と大公使とを製造せんとしたといふ風に。

かくの如く、すべての恩寵は、婦人の手を経て來るが故に、朝廷と地方と、巴里とを問はず、苟もなすあらんと欲する者は、皆某の婦人を擁せざるを得なかつた。女に愛せられ、彼女をして己れの立身出世に關心せしむる所をサロンとするならば、サロンによる程確實な成功への道はない筈である。サロンの行ふ職務は恰も今日の新聞のそれと同一であつたのである。

故に若し、人にして社會の注意を自己に引きつけやうと望むか、或は間もなく空席になる學士院の椅子を得る機會をものにしやうとする場合には、才能丈では不充分であつた。恐らく天才であつても、この種の獲得は不可能であつたらう。たゞ、しかも唯一に必要な事は、サロンによつて推薦される事であつた。この點は、今日の新聞を利用する方法と同一である。従つて、人の垂涎措く能はぬアカデミーの椅子を得たいと切願する人があつたでしょうか、彼がモンテスキューやヴルテールの如き人であつたとしても、婦人の扶助を持つ事は絶対に必要事であつた (Roustan, *The Philosophies and the French societies in the 18th century*. p. 178) 當時の文學者、學者は疑もなく皆この方法に慣熟して居つた。

今日この経過を見る者は、何人も、この夫人等の出來心が、屢々不合理な任命を取立てただらうと惶れるかもしれない。確かに、この種の不正は多く行はれた様である。然し、他方から云へば、多くの才能ある人がサロンによつて彼等の文運を開いた事は確實であつた。(註)

(註) Lambert 夫人はモンテスキューを、Tencin 夫人はマリイボー (Murivaux) を、D'Esfeend 夫人はダランベールの當選を勝ち得た。Geoffrin 夫人はたゞ一年の間に三人の學士院會員 (Watelet, Saurin 及 Abbé de Rohan) をつくり、二年後には哲學者の反對を押してマルマンテルを支持した。

たゞこゝに注意すべきはサロンにはサロンの法典とも云ふべき、一種の行法準則が存して居つた事である。當時に於ては知識は未だ獨立不可能の地位にあり、従つて購入者の心意に逆ひ得なかつたから、サロン出入の學者にかくの如き退屈な義務が負はされて居つたのも、又當然であつた。

その第一條は、機智を働かす事、愉快に振舞ふ事であり、第二條は、社交界に興味のある主題のみを取扱ふ事、換言すれば、あまり重大な問題には言及しない事であつた。サロンの大立者は、すべてこの法典を遵奉したのである。但し、この點、ルソー丈は例外の著しいものであつた。彼は、サロンの人物でない事に於て、サロンの注目を惹いた特例である。

かくの如く、サロンが學識ある人々に、すぐれた社會的地位を惜げもなく與へる様を見た一英旅行家は、「この國で學問あり才ある人の一大悦樂は、流行界の華かな集ひを支配する事である」と嘆じた。この様はいたく彼の胸を打つたに相違ないのである。英國に於て、學者文學者が沈鬱にも書籍の中に埋れ、自分達のみで交際し、「何等かの政治的苦役」に服する場合、即ち新聞記者になつた

り、或る政黨のためのパンフレットの著者となつたりする場合の外は社交場裡に現れない現状に對して、これは非常な差違を示して居つたからである。

當時サロンの形式が如何に人心に投じたかは、ネッカーが大宴會を開いて朝野の名士を饗應した事を想起すればいい。世評によると、この大宴會は、彼のすべての財政計畫よりも彼に信用を博せしめる力であつたと云はれ、又、或人はこれについて「ネッカーが畢生の大事業たる二十分の一税案は、僅か一日世人に記憶されたにすぎぬが、彼の宴會は今尙話題に上る」と云つてゐる位である。

一言にすれば哲學者の社會的誕生、これこそサロンがフランスの知識階級に與へた一大貢獻であつたが、この事は亦カフェーについても同様に正しかつた。何故なれば、サロンとカフェーは同じ道程の峠茶屋であり麓茶屋であつたからである。サロンの人々は亦カフェーに出入した。

註 カフェーについては後述参照

ブリエンチエールは云ふ「權者の側近に於て神々しく振舞ふ特權を與へられた人々は、カフェー・ブローブやカフェー・グラドローに集まれる通人の面々である。それはかの Petit Arouet と呼ばれる男、つい去年はバステイユの監獄に投ぜられた男である。彼等の自由な話振は、そこでなす事なき婦人、屈托のない男を面白がらせた。彼等はしまひに、婦人の居室に這入り込んだ。彼等の機智はこゝで身分の差別を撤廢し得た。彼等が一種の團體を作る迄は、榮ゆる者、貴き者は、始め少々驚いた。怒つて見せた。然し、腹の底では少しも怒つて居なかつた。そして終ひには自ら進んで、

かつて自分等が彼等に向つてしたと同じ洒脱と心持のよい無作法とによつて、彼等からあしらはれやうとしたのである」と（ブリエンチエール、前掲書、一四一—一四二頁）

モンテスキューの「波斯人の書簡」には、このカフェー黨遊樂の圖が次の如く畫かれてゐるのを見る。

「カフェーは、パリでは随分用ひられて居つた。そこにはカフェーを飲ます店が澤山あつた。これらの店のあるものを、世人は *nouvelles* と呼んだ。他の店では將棋を楽しんでゐる。その中の一つの店では、のんだ人に才智がつく様にカフェーを調合した。少くとも、そこから出て來た人で、そこへ入つた時から四倍も賢くなつてゐると信じないものは一人もない。

然し、これら美しい才智ある人を、私に不快に思はせたのは、彼等が國家に役に立たぬといふ事、又、彼等が自己の才智をつまらぬ事に弄ぶといふ事である。例之、私が巴里に着いた時、私は彼等が想像以上のつまらぬ論争に熱中してゐるのを發見した。問題は、其死期ばかりでなく、其祖國も分らぬ二千年前の古いギリシヤ詩人の評判に關した事であつた。二派の人々は、それがすぐれた詩人であつたといふ事は認めてゐるが、それに與へるべき價値の多少を問題として居つた。双方とも、それに價値を與へやうと思つた。然し、その名聲評論家の中で、一方は他方より高く評價したそこで争が起つた」。

モンテスキューならぬウスベックは、この争を苦々しく見て、「私は信ず、死人の名聲のためにしかくもやさしい熱心さは、生者のそれを辯護するためには、甚だ燃え上つたであらう」と嘆じてゐる。

る。(Montesquieu, Lettres persain XXXVI.)

これらカフェーの通人を、社會が如何に遇したかについては、ヴルテールの特例を見るにしくはない。

ヴルテールが英國から歸來するや、學士院は一團となつて彼を迎え、其車は群衆に遮られ、道路は充滿し、窓や階段や、露台は、讚美者をもつて滿ち、劇場に入れば酔へる群衆が、絶間なく拍手喝采を送る。戸外に出れば、全民衆が萬歳の聲を以つて送迎し、サロンに於ては、王室に於ける様な不斷の群衆で、大諸侯は一言一句も逃さじと戸口にひしめきあつて、耳をのばして居り、著名の貴婦人が彼の一颯一笑を窺はうと爪先だつてゐる。「私はヴルテールと話した」たつたこの一句が、當時新來者を大人物と變じてしまつたのである。

(11)

かくして英國の文物は、フランスの哲學的料理人の手に適當に調理された後、このサロンに於ても、美しく所せましまでに並べられたのである。

だが「食物が彼等の前に調理し、並べられ、自由にすることが出來、又消化し易いものであるといふ丈けでは充分ではない。その料理が巧みに鹽梅され、其上美味いと云ふ事が必要である。」「自然に歸れ」「人間生得の權利」等の言葉は、口腹の慾を刺戟する藥味の如きものであつた。

モンテスキューの「法の精神」「ペルシャ人の手紙」の如きは、この種の藥味が露骨に、或は秘かに調査されて、時人の口に合ふ様に配慮されて居つたのである。

我々はこの原料を持歸つた主要な輸入商人と其輸入品とを擧げて見やう。

特に英國の知識を誘致したものはヴルテールであつた。彼は確かに十八世紀の王であつた。が、それには英國の門弟としてと云ふ、條件が必要であつた。或は旅行によつて、或は交友によつて英國を知る以前の彼は、まだ眞のヴルテールではなかつた。

彼は、初めて英國から、ニュートンの哲學を分り易い言葉でフランスへ紹介した。この結果、デカルト派の物理學は、日に日に其基礎を失ひ、一七五七年に巴里から出た書簡には、バリーに於ては最早殆んどデカルトの心酔者がないと認められて居つた。

彼はロッキの著作をフランス人に推薦した。或人が、ロッキを以つてヴルテールの師であると評する程、彼はロッキを推薦して倦むところを知らなかつた。彼は、又セエクスピアを研究した最初のフランス人であつた。彼がセエクスピアに負ふ所は、甚だ深かつた。彼は自分の英語に對する造詣を利用して、難澁な多くの著作(例へば、Baker, Tillotson, Berkeley, Shaftsbury, Mandeville, Woolston)をよみ、且紹介したのであつた。

モンテスキューは、彼の原理を多く英國に於て吸収した。彼は英語を學んだが、下手であつたらしい。彼は著作ばかりでなく、個人の談話に於ても常に英國に對して賞讃を惜まなかつた。「法の精神」と英國とは、彼に於ては離す事の出來ぬ關係にあつた。

デイデローは、リチャードソンの小説の熱心なる賞讀者であつた。彼は自分の劇の多くの構想を、英國の演劇家から、殊にH. から得て居つた。彼は亦、シャフツベリーとコリンズから得るところ

ろが多かつた。

以上三人のイギリスに於ける觀察については、種々興味ある事項を我々は知る事が出来るが、これに關する著作としては、J. Churton Collins の Voltaire, Montesquieu and Rousseau in England を擧げるに止める。

ビュフォンは Hales の Statique des végétaux 及びニートンの Méthode des Fluxions を翻譯した。

エルベチウスも、草臥れずに根氣よくロンドン子をほめそやした。Mind に關する彼の大作中の意見の多くは、マンデヴィユから引出されて居つた。又ドルバッフは、確かに巴里に於ける自由人仲間の最も有力な指揮者の一人であつたが、彼の夥しい著作の大部分は、主として、イギリスの著者の翻譯からなつて居つた。

この風潮は、以上の人々に止まつたのではなく、後に實際に革命に参加した人々をも動かして居つた。

マラーは、英蘭ばかりでなく、スコットランドを旅行して居つた。彼は英語に非常に熟達して居つたから、英文で二つの著述をした。其中の一つは The chains of slavery と云ひ、後に佛語に翻譯された。

ミラボーの如きも、彼の力の成分は、彼が英國の憲法を注意深く研究したためである云はれてゐる。彼は Watson の History of Philip II. を翻譯したばかりでなく、Milton の著作の、殊に民

主的章句を含んだ部分を翻譯し、且つ Sinciere の History of the Revenue を翻譯する企圖を有して居つた。又彼は、國民議會に於て、バークの演説の章句を、恰も自分のものの如く引用した。

ムニエーは、英國の政治組織について、理論上又、實際上よく知つて居つた。彼は、英國民の文學及び政治思想に對して造詣の深かつた Le Brun と共に、英國が模範を示してゐる如き二院制度の採用を主張した。

ブリッソーも、彼の刑法論に於て、英國の制度によつて指導を受けたことを明白に指示してゐる。コンドルセーも英國の刑法組織を模範とすべしと説いてゐる。

オルレアン公の如きもこの例に洩れてゐない。Lamarine は「ジロンド黨史」に於て曰く「かくして、オルレアン公はロンドン生活で自由の氣風を味つた。そして、フランスへ、宮廷に對する傲然たる態度、人民煽動の欲、自己出生の階級に對する侮蔑、群衆に對する親交を持戻つた」と。

事實に於て、十七世紀の終りには、最も教養あるフランス人の間でさへ、英語をよむ人は、たゞ一人も見出す事が困難であつたらうに、十八世紀には反對に、同一階級で英語を知らぬ人を一人でも發見する事は前同様に困難となつたのである。

「趣味を異にする人はすべて、又最も相反する研究に従つてゐる人もすべて、この英語を知つてゐると云ふ點に於ては、丁度其間の紐帯によつてゐる如くに結合したのである」。(Buckle, op. cit., p. 220) ル・ブラン (Le Blanc) は十八世紀の中葉より少し前に、これを確證する言をなしてゐる。「我々は、この頃英語を文明の言葉の中に入れた。婦人達ですら、それを學んでゐる。そして、この哲

學好きの國民の言葉を習ふために、伊太利語をやめて了つた」と。英語の翻譯に至つては、誇張なしに、一七二五年から一七五〇年に至る間に、凡てのホープ、凡てのマゼソン、凡てのスキフト、凡てのリチャードソンが——他の群少學者については云はずもがな——彼等の言葉からフランス語に移植されたといふ事が出来た。

かくして、自己の注意を英國に向けた著名なフランス人は、英國の文學に於て、社會の構成について、又其政治組織について、自己の國には其例を見ない甚だ特殊な現象を發見したのである。

彼等の耳には、歐洲の何れの國に於ても知られてゐない程の大膽さを以つて、重大な政治的宗教的問題が論議されてゐるのが聞へた。彼等の耳には、非國教徒と國教徒、ホイッグ黨とトリイ黨が最も危険なる題目を弄び、且無制限な自由を取扱つてゐるのが聞えた。フランスに於ては、何人も論議しやうとしない事項が、英國では公に論議されてゐるのを聞いた。國家の秘事、信仰の秘事が國民の疑視に對して公開せられ、其上無遠慮に暴露されて居つた。

特に、當時のフランス人、否ヨーロッパ人を驚異させた事實は、英國に於ては公刊印刷物が或程度に於て、王が國民の制御をうけて居つたと云ふ事は、フランス人にとつて殊に奇怪な事であつたに相違ない。ルイ十四世の治世の人にして、かゝる事實を見、且、其上に一國の文化は上層階級及王の權威を減少するに従つて、増進するものであると云ふ事を知つたならば、心中の驚嘆と動搖とは到底隠し得なかつたであらう。

この結果として現れたヴルテールの歴史的著述、ルソーの民約論、モンテスキューの法の精神、其他あらゆるすぐれた思想家の著作について述べる事は止めやう。

これら一切の理論の體系的表現が百科全書の計畫であつた。一七五〇年ダランベールとデイデロを主として、百科全書の大軍が召集された。

百科全書こそフランス革命の知的總出陣であつた。ブリエンチエールは云ふ「二人で傑作はつくれない。況んや多人數に於ておや」と。(前掲書一二六頁)百科全書は彼の云ふが如く、傑作ではない。極言するならば、デカルトを忘れ、反つて、ロックやベーコンに於て再び自己を發見した「百科全書」は、それ自體が、源を尋ねると英吉利翻譯大辭典にすぎないからである。

例へば、「法の精神」は或る意味に於ては英國憲法の辯護にすぎぬ。コンデアックの感覺論も、同様に「悟性論」の翻譯にすぎない。

この事は、要するに、未だ彼等の哲學が、未完成であつた事を示すものであつた。世人が、最初客間に於て、次に街頭に於て、哲學を講じ始めた時、彼等は未だ書齋に於ける哲學研究を完成して居なかつたためにすぎない。與へるに時日を以つてするならば充分咀嚼されたことは云ふ迄もなかつた。

然し、この事は少しも彼等の價值を傷けはしない。「彼等が携へて戰場に赴いた思想の武器が哲學的に不完全であつたからとて、それがため、戦争を開始した人達の歴史的使命の意義は失はれるものでない」(ヘフデング著、前掲書五五四頁)

一命に關する場合には、吾人は間に合せの武器を使はざるを得ない。

過激な結論——消極的並びに積極的形式に於て——がフランスに於て下されて、元來其決定的原理が現はれた英國に於て、斯様な結論が下されなかつたといふ事は、奇特な對象をなして居るが、その眞の原因は、佛國に於ては、英國に於けると全く異り、舊秩序は新運動と頑強に衝突し、しかも、舊秩序は英國に於けるよりも遙かに淺薄で腐敗して居たといふ事實に求めらるべきである。其のために、フランスに於ては、社會の舊秩序は凡ての批評を打破るか、さもなければ逆に之れによつて打破されなければならない程に、極端迄進行して居つたのである。

とまれ、ヅルテールの言を其まゝ借用するならば、ルイ十五世の治世の智識の總計算は、實にこの大百科辭典によつて盡されて居るのであつた。

(III)

この百科全書學者が、先づ攻撃を開始したのは宗教であつた。彼等が最初、政治問題よりも寧ろ宗教問題にその注意を向けたといふ事には、特別の理由があつた。

この理由を説明するのに、キリスト教に對する不信仰の告白が、多くの指導的著述家にあつて、偶然一致したといふのでは勿論充分でない。何が故に、除外例なくすべてこれらの著者が、他の方面よりも、この方面を選んで彼等の注意を向けるに至つたか。何が故に、彼等の中から一人でも出てこれに反對の態度をとらなかつたか。

我々はこの問題への解答を時代と場所との二要素の中に求めねばならぬ。

その第一の理由はフランスの傳統精神にある。

フランスの著者にして、古代制度の下にあつたものは、絶えず忠誠が彼等國民の特長であることを誇りとして居つた。王に對する愛によつて、常に他國民よりも彼等が優れてゐるといふ事は、我々フランス人にとつては明白なる事實であると、彼等は確信して居つた。即ち、フランス國民の胸中に於ては、國民的光榮と國王の個人的名聲とが、強固に結びつけられて居つた。

従つて、フランスの支配者の政治的行爲は、最も強固な圍牆によつて、あらゆる非難から保護されて居つた。この意識が、永く、世界に於ける最も偉大なる民族から出た我等の王といふ觀念に於て、フランスの諸王を安全に保護して居つた。そして、この悲しむべき國民的虛榮こそ國民を重課税と隷屬に服従せしめ、彼等をして自己の王の偉大さを無益に誇らしめ、徒らに、王の勝利の華麗さに熱狂せしめた。

これに比べると、僧侶は甚だ打撃を受け易い立場にあつた。彼等は、王の場合に見るが如き國民的虛榮によつて庇護されて居なかつたばかりでなく、ボッシエを除いては誰一人として、フランス國民一般の評判を増す様な功績をあげてゐなかつた。

従つて、思想家の眼には、彼等の前に横つてゐるすべての堡壘の中で、教會は最も弱く、且最も防備の手薄いものと見做されたのである。

勿論、主権者と教會とは、一種の同盟的意識によつて結ばれて居つた。即ち、主権者が教會への服従を國民に強制するに對して、教會は王位に對する尊敬を人民に鼓吹した。かゝる關係は、社會

の進行が靜穩である時は無事である。然し、革命時代が眼前に押よせて來てゐる場合には、教會にとつて甚だ不利益な、且危険な交換取引と云はねばならなかつた。人々の思想の根柢が動搖する時には、無形の信念を基礎として、物質的有形的勢力を持つること少ない教會は、確かに、多大の打撃を受けて潰滅しなければならぬ。しかも、王は自ら教會の長男であると公言はしてゐるが、教會の權威の維持に對しては、特に何等の責任も持たなかつた。ごつちかと云へば、教會の權威よりも自己の權威維持のために、遙かに多くの配慮を拂つた。人民が公然と教會を邪魔する事は許さなかつたが、私かに攻撃する事迄は禁じなかつたのである。

第二の理由は、僧侶の人格的不信用である。

ルイ十四世の治世には、まだ僧侶の個人的性格が社會を支配するに大いに力あつた。教會の指揮者が、すべて、道德者であり、又多く有能者であつたからである。彼等のなすところは、專制的傾向を有して居つたが、公正の規範に於ては決して外れてゐなかつた。従つて、その行爲によつて生じた惡弊は、單に權力を委託された僧侶の失業によるものにはすぎぬと認められて居つた。然るに、ルイ十四世以後にはかゝる一般の見解に、大なる變化が行はれた。

僧侶は、極端に放埒に流れ、又屢々、甚だしく無知であつた。従つて、彼等の專制は社會の彼等に對する觀察を全く一變させて了つた。即ち、彼等の專制は錯誤による過失でなくして、堪え難き壓制となり、同時に服従し難き壓制と見られる様になつた。

Bossuet, Fénelon, Bourdaloue, Flechier 及び Mascaron の如き、手腕と徳性を有した人々は、多少

とも僧侶の醜行を減少して、社會の尊敬をかちうる所はあつたが、其後を繼いだ Dubois, Lafléan, Jencin 等に至つては、公々然たる墮落によつて、社會をして彼等を尊敬するを得ざらしめた。この事は、當時に於ける知識階級の勃興と相俟つて、いよ／＼僧侶に對する民衆の侮蔑を完成しつゝあつたのである。

然しながら、教會の腐敗といふ事のみを考察すれば、これは、あながち、フランス特有の事實ではなかつたのである。當時のフランスの教會の腐敗は反つて、他の多くの諸國に於て見受けるより少い程度であつた。又僧侶自身も、彼等の先行者、或は外國のそれと比較し、より以上に寛容な態度を保有して居つた。

従つて、以上二つの理由以外に、更に他の根本的事由のある事を我々は推定出来る。

故に、知識階級の攻撃が、第一に宗教に向けられたと云ふ事の眞の原因は、教會の状態よりも寧ろ當時の社會状態に於て發見さるべきである。(Toqueville, op. cit. p. 184) 即ち、トックヴィユは云ふ「問題は他の形をとりねばならぬ」。換言すれば、「問題は、當時の教會が宗教制度としての缺點は何んであつたかと云ふ事ではなく、この點に於て、革命の進行に對する障害となり、又其主要なる指揮者であつた著述家に不便なものであつたかと云ふ事である。」

自由のため、細分すれば思想の自由と、信仰の自由、この二點に於て、當時の知識階級は、その主要な防害者たる教會に公然たる駁撃を加へざるを得なかつたのである。

この事について、トックヴィユは興味ある一挿話を我々に與へてゐる。即ち、デイデロは一七六

八年にヒュームに與へた書簡に於て「貴下は、貴國の無制限な自由よりも我國の不寛容が、知識の進歩に對してより以上有利であると考へて居られるが、ドルバツハ、エルベチユース、モオレット及びシユアールは、貴下の意見に組みたくない」と。これに對して、トックヴイユは「然し、このスコットランド人が正しかつた。彼は自由人としての經驗を有して居つた。デイデローは文學者として裁論したが、ヒュームは政治家として論斷した」と評してゐる。(Ibid. p. 187)我々は云ふ迄もなくこの見解に賛成する。壓迫されたところに於て、自由に對する運動はより激烈なるのが常である。

(四)

一世紀以上を、宇宙と社會の何物であるかを了解するために費して來た人間の思想は今や遂に教會の教皇全權主義が彼等の意見に干渉する事の許すべからざるものである事を明かにした。人々は、教會が聖書の觀念や中世紀のスコラ哲學の中に、不斷に動的であり且無制限な廣さを有つ宇宙を幽閉しやうとする態度を默認し得なくなつた。

かくして、權威と理性との鬭争が開始されたのである。傳統の上に立ち、個人の理性より以上に高い形而上的權威を認め、且、幾世紀の間王の權威に保護されて來た僧侶と、地位なく富なく而も名聲はないが、自由を愛する念と、彼等自身の能力と才能に絶大の信頼を置く奮激した思想家とが、烈しい對立の形勢を維持し社會の兩端に立つたのである。

然るに、思想と信仰の自由は、其國の産業の發展程度に従つて、經濟的自由、生産消費の自由を伴ふものである。そして、これら三種の自由が綜合された時、初めて完全な社會的自由に近いものが成立するのである。

自覺したブルジョアジイは、自由の要求に最後のこの要素を加へたのである。換言すれば、フランスのブルジョアジイは、その經濟的發展のため、工業の進歩のため、思想の自由に關するこの鬭争に於て、哲學者と同盟を結んだのである。共通の敵である教會に對する兩者の同盟は完全であつた。ブルジョアジイが、當時のインテリゲンチヤに於て見出した偉人で完全なシンボルは、ゾルテール其人であつた。

攻撃は、度を過すのが常である。十八世紀末の宗教攻撃も、この傾向を免れなかつた。自體政治的團體と宗教的團體とは、本質的に異なるものであつて、同一の原理によつて支配され得ないのである。故に、若し僧侶と社會改革者とが、双方とも、この點に於て理解があつたならば、この間の和合の道は確かにあつた筈なのである。

然るに、實際は双方ともこの了解からは甚だ遠い立場にあつた。僧侶は、政府とあまり緊密な關係を結んだがため、宗教團體の立つべき使命を忘れ、専ら政治家の如く振舞ひ、改革者は改革者で、兩者の關係の離るべからざるものがあるのを見て、彼等の基礎的典型の上に建てらるべき市民的幸福を原理とする制度を成就するためには、先づ、より弱力な宗教を、政治的制度の一端として破壊することを、絶對の必要事と見て了つたのである。

従つて、この攻撃に際しては、不幸なる誤謬が敢へて行はれた。今、たとへ我々が、特權と富とを有する僧侶の存在を以つて、社會進歩に不利なものであると云ふ事を知つたとしても、我々はこ

の事によつて、キリスト教其ものゝ存在に迄敵意を感じべきでない。僧侶と宗教自體とは本質的に嚴然たる區別を有してゐる。僧侶の撤去が行はれても、キリスト教其ものは存在すべきである。が然し、フランスの人心はかゝる軌道を走り得なかつた。尤も、當時のフランス社會が、正常な軌道を通過し得なかつたについては、政府が僧侶に大なる特典を與へ、彼等を恰も何か神聖なるものゝ如くに取扱ひ、彼等を攻撃するものを異端として罰する事によつて、國民の心に、僧侶の利益とキリスト教の利益との間に、責任の不可分關係を認識せしめたといふ、特殊の事情は參酌しなければならぬ。

遮莫、熱狂したフランス國民は、魅惑に富んだものの如く絶對的不信仰に向つて奔進した。しかも、彼等はキリスト教を、攻撃するのみで、それを廢滅した後に他の宗教を樹てやうとは、少しも企てゝゐなかつた。何んとなれば、彼等は論理的、思考の結果、人間の完全性と人間に自らの力と強い信仰を持つた。彼等は、人間の自由を求めるために、自己の力に高い信頼を持つた。彼等は社會を改造し、且つ人間を改造する任務を與へられてゐると信じて疑はなかつた。この感情と激情とは、一種の新宗教となつて革命家の心を左右して居つたのである。

要之、政治革命と宗教革命とが歩調を俱にしないといふ事は、健全なる社會状態に於て追求すべき道程ではない。合理的に進歩しつゝある國民に於ては、兩者は必ず歩調を同一にし、國民は其迷信の度を減ずるに従つて自由の増加を享有しうるものである。然るにフランスに於ては、殆んどこの四十年間、専ら教會のみが攻撃されて、政府は攻撃から全く放棄されて居つた。この結果國の秩序と平衡とは破壊され、人心は最も大膽な思索に慣れながらも、其行爲は最も壓制的な專制政治によつて制禦されてゐるといふ奇怪な生活を續けて居つたのである。(Buckle, op. cit., p. 247-248) 従つて、フランス革命が起るや、革命は、教養ある主人に對する無智な奴隸の單なる暴動でなく、開明した知識の資源によつて、隸屬から生れた絶望の念の助成された人々の一揆であつたのである。總觀すれば、この期に於ては何等著しい政治的社會的攻撃は行はれなかつた様である。ペルシヤ人の書簡」は反語偶語に富んで居つたが、それ丈に微妙であり、巧妙であると共に慎重であつた。「法の精神」は漸く自由主義の端緒を語るものであつた。サンピエールの如きは、其宏遠な理想も、徒らに失望を求めたのみであつた。

主として、宗教改革にこの殆んど半世紀程が費やされたと云つてよかつたのである。